

## 新しい年2009年を 迎えるにあたり

2008年、CRNは日本語版、英語版、中国語版ともに発展を遂げた。特に、中国語版のアクセス数の上昇は目ざましい。

その裏には、コンテンツの充実とともにリアルな場での活動、すなわち東アジア子ども学交流プログラムの成功がある。昨年4月に東京のお茶の水女子大学、10月末から11月初めにかけては中国の浙江師範大学杭州幼児師範学院で行われた学術交流の成果が、大きな役割を果たしたと考えられる。

日本文化の根源は中国にあり、漢字文化を共有する者同士の話し合いは、意識する、しないにかかわらず、分かち合うものが大きかったことが成功の理由であ

ろう。それにもまして、参加者全員が子ども達への優しいまなざしをもっていただけかもしれない。また、交流プログラムで話し合った内容は、レベルの高いものであった。

CRNは今、10余年間にわたり積み上げてきたものに2008年の実績を加え、2009年度に向け更なる展開を目指したいと考えている。それには、コンテンツの充実ばかりでなく、「子ども学」を柱にしてグローバル化をはかる必要がある。未だ実現していない「子どもの世紀」を実現するためにも。

引き続き、CRNをご支援の程、宜しくお願い申し上げます。



Child Research Net 所長

小林 登

### 第3回東アジア「子ども学」交流プログラム活動報告

2008年10～11月、中国杭州にて第3回東アジア子ども学交流プログラムを行いました。活動報告の詳細は2ページをご覧ください。

## 東アジア「子ども学」交流プログラムとは？

2007年11月に中国上海での開幕式を経て、交流プログラムの第1回を中国長沙にある長沙師範専科学校にて、2008年4月には第2回を東京・お茶の水女子大学にて開催しました。過去のプログラム内容は、CRNサイトでご報告しておりますので、そちらをご覧ください。

### 第三届东亚儿童科学国际研讨会



<http://www2.crn.or.jp/blog/event/03/0306/>

#### プログラムの狙い

東アジアにおいて育児・保育・幼児養育をテーマとする研究者の相互交換講義を支援し、子ども学の普及ならびに国際化を図り、子どもを取り巻く環境の改善や諸問題の解決に役立つ学術活動推進を目指す。

**主催** チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)、華東師範大学

**協賛** (株) ベネッセコーポレーション、ベネッセ次世代育成研究所

## チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) とは？

「子ども学」研究所です。  
「子ども学」を柱に、インターネットによるネットワークと、シンポジウム、講演、プレイショップなどの研究活動を生かし、世界中の研究機関や研究者と交流しながら、子どもを取り巻く諸問題の解決に取り組んでいます。

今回は、2008年10月に、中国杭州にて開催しました第3回交流プログラムの内容をご報告します。

●第3回活動報告

(2008年10月31日、11月1日 浙江師範大学杭州幼児師範学院)

●テーマ

子どもに優しいグランド・デザイン—Child-Caring Design (CCD)—を実現するために、我々大人は何ができるのか。

●登壇者

小林登 (CRN 所長、東京大学名誉教授)、朱家雄 (華東師範大学教授)、秦金亮 (浙江師範大学杭州幼児師範学院院長)、内田伸子 (お茶の水女子大学副学長)、榊原洋一 (お茶の水女子大学教授)、傅根躍 (浙江師範大学教育学院教授)、戴淑鳳 (北京大学第一臨床医学院小児科教授)、王振宇 (華東師範大学教授)

※名前は登壇順

第3回東アジア子ども学交流プログラムのテーマは、「子どもに優しいグランド・デザイン—Child-Caring Design (CCD)—を実現するために、我々大人は何ができるのか」。このテーマについて、日中両国から、教育、医学など専門分野の異なる子ども関係の研究者が集い、学術発表や意見交換を行いました。

会議には、浙江師範大学の学生や浙江地方の幼児教育関係者を中心に、2日間で延べ500人以上が出席しました。

1日目の講演 (2008年10月31日)

●Child-Caring Design (CCD)



小林 登教授

子どもに優しいグランド・デザイン (Child-Caring Design) の必要性と基本理念について基調講演を行いました。大人中心の社会では常に危機にある子ども達を救う為に、子どもの生活の在り方ばかりでなく、生活の中にある教材、玩具、学校、教育制度、そして都市までを子どもにとってより良くデザインしていく必要性を説明しました。そして、そのために、「Child Science」による知見が重要であり、脳科学を柱にする必要があると述べました。この基本的な主張をもとに、その後2日間にわたる講演、ディスカッションが行われることとなりました。

●子どもが見る世界



朱 家雄教授

子ども中心の発想、子どもの目線に立つときに、我々大人は何をすべきなのか。「科学でなければいけないこと、子どもの発想でなければいけないこと」が必須条件ですが、我々大人はどこまでできるのかについて、哲学や人類進化などマクロ的な視点で言及しました。

●幼児の興味・好みと幼稚園の環境作り



秦 金亮教授

幼児の発達に効果的な幼稚園環境を作り出すために必要なことは、幼児の興味や好みを理解し、心の声に耳を傾け、認知の特性を把握することが重要であると述べました。浙江師範大学付属幼稚園における子どもの色彩の好みによる環境・空間・カリキュラムのデザイン実践例の紹介もあり、説得力のある発表となりました。

2日目の講演 (2008年11月1日)

●子どものウソは「嘘」か？



内田伸子教授

嘘やだましの基底にある認知のメカニズムを考察し、子どもは他人をだますことができるのかについて解説しました。想起のからくりや会話に潜むウソ出現のからくりを大人が知らず、自分の基準で子どもを見てしまった結果、子どものウソが「嘘」になるのであり、乳幼児期、特に自我が芽生える2歳代から、親に認められ、何よりも愛されて育った子どもは、決して嘘をつかないし他人をだましたりしないということでした。

●発達障害と保育



榊原洋一教授

集団保育の場において「気になる子どもたち」を発達障害と呼ばれる精神医学的概念に当てはめて考えられるよう、保育園や幼稚園の保育士、教諭が、発達障害についての深い知識を持つ重要性を訴えました。そして、発達障害の概念と、発達障害を持つ子どもたちへの対応の仕方、幼稚園・保育園の環境のあり方 (CCD) について詳しく説明しました。

日本側の講演と照合する形で、中国側からは、傅根躍教授が子どもの追従的行動について発達心理学的な講演を、戴淑鳳教授が子どもの知覚発達障害について小児医学的な講演を行いました。

●幼児の追従的行動について



傅 根躍教授

子どもが4歳から他人に追従的行動を始めることが明らかとなった実験を紹介しました。幼稚園児たちに、幾つかの絵画作品に点数をつけさせた後、作者を登場させ再びその作品に点数をつけさせると、3歳の子どもは終始一貫して最初につけた点数を繰り返すが、4歳になると作者を前にした時には点数を高めにつけるといった実験結果でした。

●子どもの知覚発達障害と家庭教育環境作り



戴 淑鳳教授

子どもの知覚発達のための家庭環境作りの重要性を述べました。家庭教育環境は知覚発達障害の主な要因となり、子どもの心理行動や落ちこぼれを引き起こす重要な原因となるという説を背景に、妊娠期、胎児期、成長の臨界期（0～3歳）の3段階別に、どのような家庭教育環境が望ましいのかを具体的に説明しました。

最後に、日中両国の登壇者で、シンポジウム「子どもの世界と大人の世界」を行いました。まずビデオで、中国の幼稚園での子どもたちの様子を観察し、音楽を聴いた子どもたちが何を想像していたのかについて話し合いました。それにきっかけに、大人の視点と子どもの視点のギャップについて、データなどを示しながら討論が行われました。

日本 Good Toy 展

プログラム期間中、東京おもちゃ美術館多田千尋館長の監修のもと、日本 Good Toy展を開催しました。日本に流通する優秀な玩具に贈られる「グッド・トイ賞」受賞作品



※協力:東京おもちゃ美術館

の中から、心や身体の成長に必要な「イメージーション力」、「自然や科学への好奇心」、「音楽アートな感性」、「運動能力」、「コミュニケーション力」、以上5つの栄養素を育むことができるものを厳選し紹介しました。中国現地の幼児教育関係者や研究者は興味津々な様子で見学されており、日本の玩具の質の高さを中国に示すよい機会となりました。



第3回は、言葉の壁を超えた学術レベルの高いプログラムが実現し、東アジアにおける子ども学交流がまた大きく前進したと感じています。子どもたちの幸せいっばいの生活の実現に向けて、このような活動をこれからも積み上げていきたいと考えております。今後ともCRNの活動にご指導、ご支援のほど、宜しくお願いします。

本の紹介

東アジア「子ども学」交流プログラム報告書 (2009年3月発刊)のお知らせ

第1・2・3回の詳細内容をまとめた報告書を発刊します。2年間のプログラムを通して築き上げた、東アジアにおける「子ども学」の知見がぎっしりつまった一冊となります。ご期待ください!



CRN今後の予定

日・英・中3サイト それぞれ隔週で定例更新

各サイトとも、2週間に1回の更新で、常に新鮮な情報をお届けします。また3言語ともに、月1回の頻度で、特別な情報をお届けするメルマガ通信を発行しております。ぜひご登録ください(登録無料)。

第4回東アジア交流プログラム開催

2009年5月21日(木)、22日(金)、中国上海(華東師範大学)にて開催する予定です。

学会報告

日本子ども学会——2008年学術集会の報告

- 【1日目】 9月27日(土)10:00~17:30
  - 「いじめについて考える意義」 浜田寿美男(奈良女子大学教授・大会推進委員長)
  - 基調講演「いじめから見てくるもの—社会の問題として」 鷲田清一(大阪大学総長)
  - シンポジウムI「いじめの背景となる子どもたちの仲間関係」  
オーガナイザー: 麻生武(奈良女子大学教授) 池田曜子(奈良女子大学大学院研究生・近畿大学非常勤講師) 内藤朝雄(明治大学准教授) 土方由起子(元小学校教師・奈良女子大学大学院) 古川まり子(安堵小学校教諭) その他、高校生など
- 【2日目】 9月28日(日)10:00~16:30
  - 特別講演「子どもたちが言えないけれど、気づいてほしいこと」 大河内祥晴(愛知県西尾市いじめ相談員)
  - シンポジウムII「いじめを再定義する」  
オーガナイザー: 浜田寿美男 伊東毅(武蔵野美術大学教授) 土井隆義(筑波大学教授) 内藤朝雄(明治大学准教授)

鷲田清一先生(大阪大学総長)は基調講演の中で、「排除の論理に対抗する、集団形成の論理を作れなかった」ことが、「いじめ」を阻止できない理由の一つだと指摘しました。さらに、いじめをセンセーショナルに扱う報道の姿勢がいじめを助長しているとも述べ、これらの問題を解決するために、地域社会がどんどん介入し、「仲裁」することが必要だとの提言がありました。



<発行日> 2009/02/28  
 <発行> チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)  
 〒101-8685 東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビル(株)ベネッセコーポレーション内  
 <編集人> 後藤憲子  
 <編集スタッフ> 松本留奈 齋藤 岩崎菜穂子 梶井玲子  
 <デザイン> 森一典デザイン事務所

## 日本語版

2008年3月のリニューアル後は、今まで以上に医療や教育の専門家のみならず、子育て中の方や、海外在住の方など、さまざまな分野の方から新しいテーマでの投稿や議論をいただき、サイトは益々の充実、発展を遂げています。ここでは、最近特に反響のあったコーナーを中心に紹介したいと思います。



### 【研究室を訪れる】

#### ソーシャル・スキル・トレーニング(SST)研究室

軽度発達障害児、あるいは集団が苦手な問題行動のある子どもを対象とした治療として、就学前や低学年層への体験型のソーシャルスキルトレーニング(SST)を研究。最新の原稿は、音楽療法によって発達にともなう多様な障害をもった子どもたちの療育を実践している方へのインタビューです。

### 【研究室を訪れる】

#### 子どもとメディア研究室

子どもたちには大人が想像もできないメディアの使い方をすることがある。そこで、子どもから学ぶ姿勢で、子どもとメディアに関する研究に取り組んでいくのが「CRN子どもとメディア研究室」です。最新の原稿「過渡期のネット文化時代におけるネットジェネレーション」では、最近問題になっている子どもへのネット規制について述べています。

### 【小林登文庫】

#### 脳と教育

小林登CRN所長が、脳科学の専門家である片岡宏隆氏のご協力を得て、The International Mind, Brain and Education Society (IMBES) が発行している学会誌の論文の内容に私見を加えて紹介するという新しい試みです。半分の脳を失った子ども達の見事な発達の事例などをご紹介しています。

### 【論文・レポートを読む】

#### ネットジェネレーションの教育

ネット社会を生きる世代にとって必要な教育についてのレポートです。「アキノバラ—レジリエンスの育成を！」では、アキノバラで起こった無差別殺人事件を例に、逆境の世に育つ子どもたちや若者へ、学校教育や家庭教育におけるレジリエンス(困難な状況にも関わらず、うまく適応する過程、能力、および結果のこと)の育成を呼び掛けています。

### 【論文・レポートを読む】

#### (連載) 普段着の小児科医 子育ての脳科学

新しくスタートした連載「子育ての脳科学」で

は、小児科医であり、4児の父でもある筆者が、子どもの心を育むための親子関係の重要ポイントを、分かりやすく紹介します。毎月10・20・30日に更新しています。

### 【論点】

#### 妊婦の飲酒と胎児性アルコール症候群 (Fetal Alcohol Syndrome: FAS)

育児・保育・教育に関して、さまざまな立場の識者からその考えを集めました。最新の原稿「妊婦の飲酒と胎児性アルコール症候群 (Fetal Alcohol Syndrome: FAS)」では、現在10%を超えているといわれる妊婦の飲酒者について、その危険性を指摘しています。

## 英語版



### 【Monthly Articles on Children】

研究者やCRNスタッフが、最近話題のニュースや講演会の報告などを取り上げています。「Lessons from a naturalist」は、イギリスのナチュラリストでプロデューサーのデイビッド・アッテンボロー氏の生い立ちや両親から学んだことを軸に、子どもたちが自分で考える力を育むことの大切さを訴えています。

### 【Research Papers】

各国の研究者による専門的な論文が気軽にお読みいただけるコーナーです。「Research on English Performances and Motivation at Osaka Jogakuin College」は、大阪女学院大学の英語教育への取り組みについて、同大学のスティーブ・マッカーティ教授が紹介しています。4年間のカリキュラムを通して、自分でテーマを見つけ、調べ、コンテストで発表するまでの成長を追います。「Continuity of Maternal, Neonatal and Child Health Care through MCH Handbook for Ensuring the Quality of Life」は、2008年11月に東京で開かれた第6回母子手帳国際会議の様子を伝えています。日本では当たり前のように活用されている母子手帳に触発されて、多くの国で、文化や社会経済状況を反映した様々な取り組みが行われています。

### 【Presentations】

CRN や子ども学に関連したシンポジウムやセミナーなどの記録をご紹介します。「Educational Reform and Child Raising in Finland」は、甲南女子大学国際子ども学センターがフィンランドとアメリカの研究者を招い

て開いた「子ども学講演会」の講演録です。海外の先進事例を通し、各国の子ども達に対する人々の思いが伝わってきます。

### 【Teen's Photo Project】

子ども達の写真やエッセイを掲載し、生の声を伝えます。

## 中国語版

中国国内の育児・保育・教育に関心のある方向けに、日本や海外情報の紹介、中国独自の取り組み、並びにCRNの活動などを紹介しています。ここでは、2008年に特に好評を得たコーナーについてご紹介いたします。



### 【雑誌「学前教育研究」】

学前に関する研究誌では、中国で屈指の権威的な存在。中国の幼児教育最前線の情報、就学前の芸術、数学教育についての研究を紹介しています。

### 【児童保健】

北京師範大学の万歆教授が子どもの成長にかかわる話題をピックアップして紹介します。特に、中国の子どもに関する様々な事件や事情を通じて考え出された、子どもを健やかに成長させるためのコツは必見です。最近取り上げたテーマ: 「子供はなぜ夜中に目を閉じたままで泣くのか」、「震災時の子どもの心のケア」など。

### 【日本の幼児教育に関する情報】

#### (新設コーナー)

日本の幼稚園・保育園の歴史や現状の紹介、子どもの作品、また中国人研究者の子ども達の日本の保育園での経験などを細かく記録した資料を交えて、日本の幼児教育の実態をつづっています。中国語圏の方にとっては、日本の幼児教育を知る絶好のツールとなります。

### 【非正規学前教育研究】

私たちはつい都市部の子どもたちに注目し、農村部の子どもたちを忘れがちですが、中国では都市に出稼ぎに行く農民工が急速に増え、農民工の子どもたちの教育問題は大きな社会問題となっています。北京師範大学の張燕先生がこのような社会問題に取り組み、幼稚園に行けない子どもたちに対し学前教育支援活動を行っている様子を刻々と記録しています。